

書写力向上をめざして

—基礎・基本とその応用—【第36回】

「書写の要素」について ㊦ 〈字形(19)〉

山梨大学大学院教育学研究科教授 宮澤 鷺州

今月号では「内外の組み立て方」のうち、「構(かまえ)」を取り上げ、二方向、三方向そして四方向で囲むパターンとその字例を見ることにします。



字形の整え方 (十八)

先月号に引き続き、漢字の「内外の組み立て方」について見ていきます。

(1) 内外の組み立て文字について(二月号に続く)

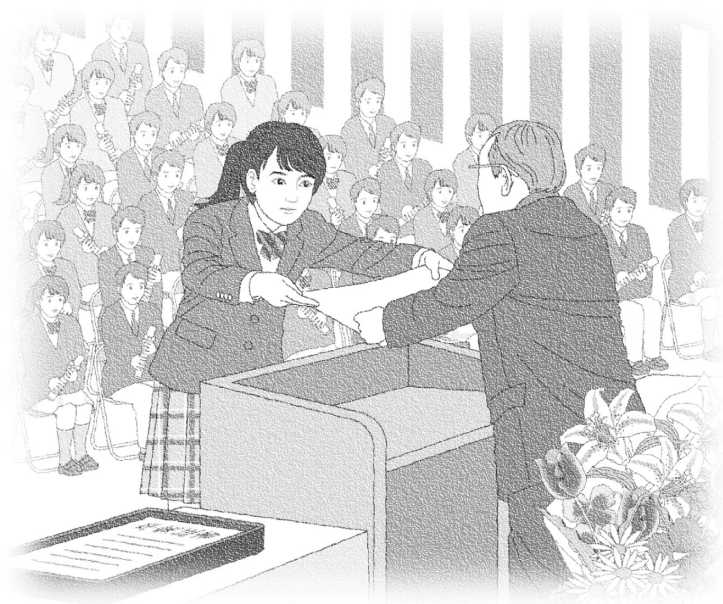
内外の組み立てパターンを大別すると、内部を二方向、三方向、四方向のそれぞれから囲む組み立ての三種類になります。部首では、「繞(によ

う)」「垂(たれ)」「構(かまえ)」などがこれに相当します。先月号では、「繞」「垂」など、内部を二方向から囲むパターンを確認しました。今月号は、先月号で掲載した図を再び掲げて、「C」の「構」を中心にした二・三・四方向を囲むパターンを見ることにします。

C「構」

このパターンには次の三種類があります。それぞれの主な部首名とともに挙げてみましょう。

・二方向から内部を囲むパターン



「行構(ぎょうがまえ)」「式構(しきがまえ)」「気構(きがまえ)」「包構(つつみがまえ)」など。

・三方向から内部を囲むパターン

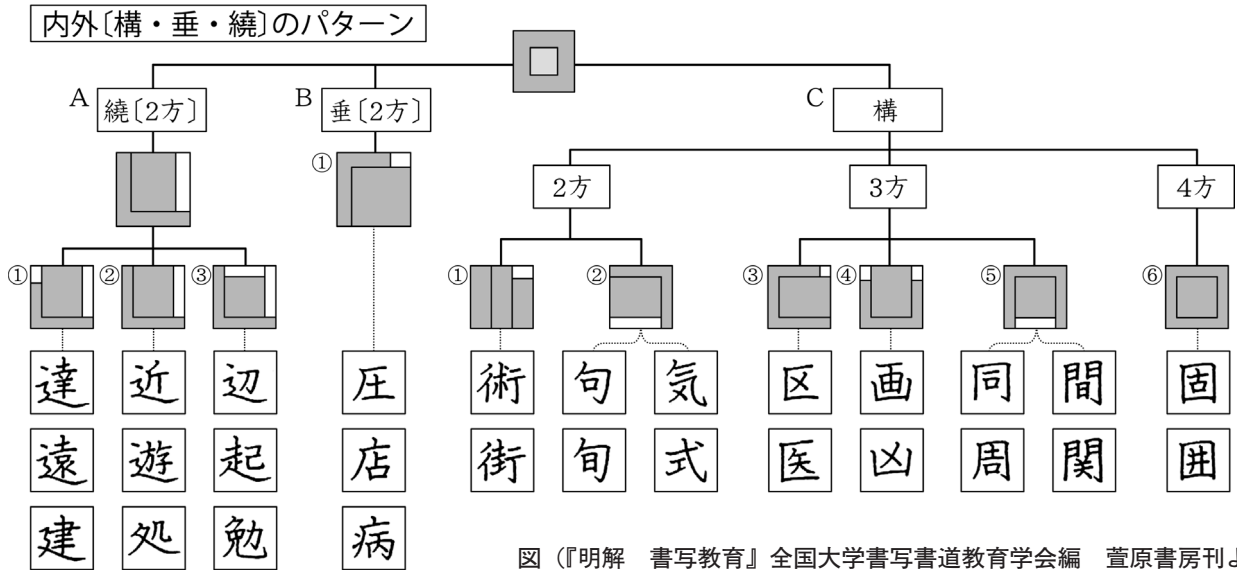
「箱構(はこがまえ)」「かくし構(かくしがまえ)」「口(函)繞(かんにょう)・うけばこ」「門構(もんがまえ)」など。

・四方向から内部を囲むパターン

「国構(くにがまえ)」など。

C-①

○「行構」



図(『明解 書写教育』全国大学書写書道教育学会編 萱原書房刊より)

サンドイッチのように、内部を左右二方向から囲んで組み立てるパターンです。左右の組み立て方と同じ要領なのですが、「構」の部首として捉えられていることから、内外のパターンに属させています。「行構」がこれに相当します。右の部分は次の図のように、左部・内部に対して、やや下に位置づける字形になります。

術 街 衝 衛 衡

なお、「行」の字は、十字路の形で、「行く、行き交う、みちすじ」などの意味があります。この

内部に音標おんびょうになる部分を入れて「術・街」などの漢字が作られています。また、「行」の偏へんに相当する部分を「行人偏(ぎょうにんべん)」と言いますが、「行」に使われ人偏の形に似ていることからこの名があります。したがって、「行人偏」の漢字「往・徑・従」などは、「行構」の右部の「亍」を除いたものと捉えることができます。

C-② 内部を上部和右部で囲むパターンで、「包構」「式構」「気構」などがあります。

○「包構」

左払いと横から縦への折れによって内部を囲むパターンに「包構」の部首があります。字例は少なく、学習漢字としては「包」があり、それ以外の常用漢字では「勺・匆」があります。「包」

は内部の「己」の曲がり強調されることから、「包」の二画目の縦画部が短く書かれます。その点、「勺・匆」には「包構」の本来の形が見られます。

なお、部首が「口」の「句」や「司」も「包構」と同様のパターンと捉えることができます。次の図のように、内部の部分は、中心より左に位置づけられます。

包 勺 匆 (句・司)

○「式構」

上部の横画と右側の反りなどで内部を囲むパターンに「式構」があります。該当する漢字は少なく、学習漢字としては「式」のみとなります。

字形を整える上で注意するポイントは、横画の次に内部の「エ」を書き、その後反り・点と続くので、「エ」を書くときは、次の反りの方向や長さ、位置などを考慮する必要があります。上下に長く伸びる反りを想定して「エ」は小さめにまとめて書くことが大切です。

「式構」に似た部分を持つ漢字に「武」があります。部首は「止」なのですが、「式構」と構造がほぼ同じなので、C-②のパターンに入れてよいと思います。

式

武

○「氣構」

上部と右部を、左払い・横画・横画と反りの折れによって内部を囲むパターンに「氣構」があります。学習漢字では、「氣」のみですが、「氣構」の形を持つ漢字として「汽（部首はサンズイ）」があります。次の図のように、内部の「メ」は文字の中心よりかなり左側に位置づけられることがわかります。四画目の反り部が内部の空間をえぐるので、余計に「メ」は左側に寄ることになります。この反りが外に向かい過ぎると「メ」が中心寄りになり、左右の均衡が崩れた字形になりますので注意が必要です。



C-3

上・左・下部の三方から内部を組み立てるパターンです。「箱構」がこれに相当します。

○「箱構」（かくし構）

「箱構」の学習漢字の字例には「区・医」があり、それ以外の常用漢字には「匠・匹・匿」があります。左部に縦画があるので、内部の「メ」「矢」は中心より右に位置つけて組み立てます。筆順が、上部の横画を書いた直後に内部を書くために、どうしても「メ・矢」を中心に位置づけやすくなります。このように書くことと左側に画が集中し、風通しの悪い字形に陥ることになります。内部の部

分を書く際は、次に縦画部が来ることを想定して書く必要があります。



ところで、右記の漢字のすべての部首を「箱構」として捉えて述べましたが、「康熙字典」による明朝体ではもう少し厳密な区別がありました。

「箱構」は、方形の箱の象形で、左部・下部を縦から横に折れて書き、箱の種類に関する字（匠・匣など）となります。一方、縦から横への折れではなく、曲がりとして捉える文字もあります。これを「かくし構」と言います。一面に区切られることを示す指事文字で、「区切る、かくす」などの意味に関する字（区〈區〉・匹・匿）になります。

また、「医」は旧字体「醫（部首は酉）」の左上部をとって新字体としていますが、「医」は、元は矢を入れる箱を意味する字で、現在の「医学・医者」などに使われる意味の漢字とは別字でした。したがって、現在の「医」を元の意味として捉えるのであれば「かくし構」に分類されることになります。しかし、現在の明朝体活字では「箱構」も「かくし構」も区別することなく扱われています。

部首の分類一つを見ても、漢字が揺れ動いて展開していることがわかります。書写指導において

は、このような展開を理解した上で今日使われている字体や適切な字形を根拠としたいものです。

C-4

左右部と下部の三方で内部を囲むパターンです。部首では「冂繞・うげばこ」があります。

○「冂繞・うげばこ」

左・下部は縦から横への折れで、右部は縦画で囲む部首です。学習漢字では「出・画」の二文字があります。基本的には、内部の部分を広めに空けることから、左右の縦画（部）は垂直ではなく、下にすぼむ方向になります。ただし、「出」は同じ形が繰り返される特別な字で、この場合、上の「冂」は下にすぼみ、下の「凵」はやや下に広がる方向にすると「出」の中央部が引き締まった字形になり、まとまりがよくなります。

なお、「凸・凹」の筆順に誤りが多いのは、両字の部首が「凵」であることを知らないため引き起こされていると考えます。「凵」は最後に書く部分という認識があれば「凸・凹」の正しい筆順は必ずから導き出せるかと思えます。図に筆順を示したので参考にしてください。



C-5

左部、右部、上部の三方から内部を囲むパターン

ンで、「**門構**」^{けいがま}「**門構**」などがあります。

○「**口構**」

「**口構**」を部首とする字例では、「**円・内・冊・再**」などがあります。「**内**」以外は、左右の縦画（**部**）を垂直におろし、縦長の概形にします。内部との組み立て方については、独立性の高い形が入る漢字は少なく、「**円**」は縦画・横画が「**構**」に接し、「**内**」は「**入**」の一部が外に飛び出し、「**冊・再**」も横画の両端が左右に出るなど、「**門構**」のような、部分と部分の組み立てとは異なります。そもそも、「**口構**」は「**遠い境界の地、はるか**」という意味なのですが、「**口構**」に属す漢字に統一的な意味は認められないようです。図形的な捉え方での部首分類が行われたものと思われまます。なお、「**円**」の旧字体「**圓**」の部首は「**国構**」です。

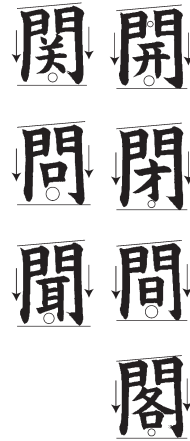
円内冊再

○「**門構**」

左右の柱に戸（扉）をつけた形を象ったのが「**門構**」です。内部に音標を入れて組み立てます。左右対称の二つの形が並び、上部にすき間があることから、厳密には、三方を囲んでいるとは言いがたいのですが、これをワンセットと捉えて三方を囲むパターンとして扱います。

左右の縦画（**部**）は長短ともに垂直に立て、横

画は平行でそれぞれの画間が等間隔になるように組み立てます。内部に大きな空間を作り、音標となる部分を入れやすくします。内部に入る部分は、「**門構**」からはみ出さないように納めます。



なお、「**門構**」を部首にする漢字の中で、「**問**」は、「**門**」が音標になっていることから「**問**」の部首は「**口**」、「**聞**」の部首は「**耳**」として分類されています。部首指導をする際は注意が必要です。ただし、構造上「**門構**」の漢字と何ら変わりがないので、書写指導の字形指導においては「**問**」も「**門構**」の学習漢字として扱うことが多いようです（**問題**「**質問**」「**新聞**」「**見聞**」などの言葉が教材化するなど）。

C-6

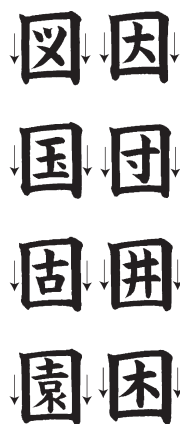
○「**国構**」

内部を四方から囲むパターンで、「**国構**」が代表的な部首です。「**国構**」は、ある区域を表す形で、その中に音標を入れて区域や取り囲む意などを示しています。多くは縦長四角の概形になる字形ですが、横長四角の漢字もあります。なお、縦画・横画で四方を囲む漢字はほかに「**口・日・目・田**」などもあります。ただし、これらはすべてそ

れ自体が部首として成り立っています。

・「**国構**」の中で、縦長四角の形を取り、左右の縦画が垂直になる字例

「**国構**」を部首にする漢字の多くは、縦長四角の形になります。したがって、左右の縦画（**部**）は垂直に組み立てます。内部の漢字（**部分**）の字形変化はあまり見られません。



・「**国構**」の中で、横広四角の形を取り、左右の縦画が内にすぼまる字例

「**国構**」と言えば「**国・図**」などに代表される縦長四角の概形を思い浮かべますが、「**四・回**」のように、横長四角の概形になる「**国構**」の漢字も存在します。「**四**」は内部の画が左右に張り出す勢いがあり、「**回**」の内部の「**口**」が横長の構造を持つことなどによって外枠の形も横長四角になったものと捉えることができます。

四回

次回より、具体的な字例によって、組み立て文字の指導方法を考えてみます。